
～とことん引っ掻き回しに来た～異世界訪問録

鳴る神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜とことん引っ掻き回しに来た〜異世界訪問録

【Nコード】

N2238J

【作者名】

鳴る神

【あらすじ】

「〜とことん引っ掻き回しに来た〜」の蒼埜 十夜が異世界で大暴れ！？※ド素人でアホな作者の作品ですが、読んでくださるとうれしいです。

ゼロ魔編第一話..芽生えた殺意、ジョゼフの進化。(前書き)

番外編第一段はゼロの使い魔です！

しかしヤバい…

変なテンションで書いたから酷いかもしれない…

それでもいいならGO↓

ゼロ魔編第一話..芽生えた殺意、ジョゼフの進化。

side Toya

光を感じた。

あの俺とエヴァを引き裂いた憎き邪神が生み出した穴から落とされて、結構な時間が経つのだが、ようやく終わりのようだ。

エヴァと俺を引き離したことは許されんが、どうせ勝てるわけがないので諦めて異世界を楽しむことにするか…

おっ、そろそろ出れるな！

光の先に見えたのは…

オッサンでした(笑)

「ハ、アツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハ

取り敢えず今は…

「死にさらせ！こんのホモ野郎がああああああああああ
ああッッッ！！！！！」

若干強めのデコピンをホモ野郎に食らわす！

ベゴォッ！ビュッ！ゴシヤア！！

取り敢えず死なない程度にデコピンをホモ野郎に放ったのだが…や
っぱり俺のデコピンはそこらのデコピンとは違うらしい。
ベゴォ、等というデコピンにあるまじき異音が響き、その後水平に
飛んで部屋の壁に激突したのだ。

うむ、やり過ぎたな。

さっきから怒っているせいか、額が焼き付くように熱いのだが、気
合いで無視して吹っ飛んだホモの所へ向かう。

うわゝデコピン一発なのに身体中の骨がボツキボキに折れて虫の息
じゃん…

うゝんそれにしても、このオッサンをどっかで見たことあるような…

………

………

………

…

あつ、ゼロ魔のオッサンじゃん！

…てか俺って使い魔！？さっきのコントラクト・サーヴァントか！
？俺が「神の頭脳・ミョズニトニルン」かよ！？

つーことは俺は”全ての魔法具を使える”能力…だっけ？それを手
に入れたんだよな？

…ってことは俺の「無限の剣製」アンリミテッドブレイドワークスの全てを完璧に扱えるってことか
よ…

…超チートじゃん？

そんな風にのんびり考えていたんだが…

やべ、オッサン死にそうじゃん。

オッサンの上下していた胸の動きが段々ゆっくりになっているのだ。

原作ブレイクしろとは言われたけど、流石にこの原作ブレイクは無
いわ…

「つうことで蘇れガチホモ」

ヴォン！

ガチホモに俺の気を与えて復活させる。

かなり気を与え過ぎた気がするけど、気にしな…い気にしな…い。

俺の気を受けてガチホモの体はあつという間に回復し、ガチホモは

「うむ、自己紹介でもしようか？私はガリア国国王ジョゼフだ。それにしても、私は君のような使い魔を持てて幸せだよ！」

バツ、バババツと、ポージングをしながら白い歯をキラリン☆と光らせるガチホモ改め、ジョゼフ改め変態。

濃いなあ…

「ああ…俺はトーヤ・アオノだ。よろしく頼むぜジョゼフ。」

あんまり近づきたくねえ…

「トーヤ君か…：…そうだ！何か褒美を取らせようじゃないか！何でも言ってみなさい！この素晴らしい力をくれた君にはお礼がしたいからね！」

喋りながらもポージングをとり続ける。

「じゃあガリアの政権ちょうだい。」

「いいとも！！」

「いいんかい！？」

無理だと思いつつも聞いてみたらアツサリ許可しやがった。

「王座などどうでもいい！君にあげるさ！」

キラリン☆

ウザいなゝ

でも都合がいいな…

「なあジョゼフ、その力を強くする方法を教えるから俺と組まないか？」

俺は原作ブレイクの為に提案した…

ゼロ魔編第一話..芽生えた殺意、ジョゼフの進化。(後書き)

駄文だね。

ジョゼフが凄いキャラになっちゃった…
基本的に番外編は一話が少し短いです。

こんなアホな作者の駄文で良ければ読んでやって下さい。

第二話：ストレス発散八つ当たり。 (前書き)

ども、鳴る神です。

相変わらずの駄文ですが、
それでもいい！という猛者はどうぞ。

第二話：ストレス発散八つ当たり。

Side Toya

「つまり、君はブリミルを信仰する奴等を滅ぼすために邪神様により使わされた邪神様の使者であり、私の力は間接的には邪神様からもたらされた物であると…」

胸を張り、大胸筋をピクピクさせながら聞いてくるジョゼフ：

テカってるね〜

「そうだ。ジョゼフ、お前は俺の現地協力者ってことだな。だからお前には協力する代わりに力を与えたんだ。…協力してくれるなら更に力を与えたるぞ？」

コイツを協力者にして戦争でも仕掛けるか…

「おおっ…！今より更なる力をくれるのですか！？このジョゼフ、邪神様を信仰しますぞ！」

祈りのポーズ☆！

とかいいながら、妙に艶のある40代のオッサンが天に向かって笑顔でポージングを決めまくっている。

ぶっちゃけキモい：

「ではこれよりお前の力を高める物をやろう。ほら、受け取れ。」

そう言って投影したのは、ダンベル・バーベルのセット。

「こ、これは？重たいが…」

あゝこの時代には筋トレの概念は無かったっけ：

「それをダンベルとバーベルと言ってな、毎日腕で持ち上げるとお前の力が強くなるんだ。他にも運動をするとお前の力は強くなるんだ。」

気の力だしな：

「ホントですか！？それだけで新たな力を得られるんですか！？なら私はこれから早速中庭で運動してきます！」

キラリ☆と齒を光らせながら走り去っていく変態。

うん、これはもう原作崩壊してるよね：

俺はそう思いながら、とあることを実行するために中庭に移動した：

side out

Side Jozefu

[illegible]

私は今、邪神様の使いであり、私の使い魔であるトーヤに渡されたダンベルを中庭でひたすら持ち上げたり、下げたりしている。

「クウ…ッ！ 全身が脈動している！これが力を使うということかつ！？」

全身の筋肉が波打ち、運動する度に筋肉が歓喜の雄叫びを上げる！

「ふう、次だ！」

ダンベルを地面に置いてから腕立て伏せに移行する。

「ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん
ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん
ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん
ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん ふん」

来た来た来た来たあっ！！
これか？この運動がいいんか？

「ようジョゼフ、やってるな」

私が運動しているとトーヤが歩いて来た。

「おお、トーヤよ！言うとおりでな！運動する度に筋肉が歓喜している！！」

笑いながら感謝を捧げる。

若干トーヤの顔が引きつったのは何でだ？

「ジョゼフ、今から俺は野暮用に行く。帰ってくるまでにトリステインの魔法学校の近くに俺の家を用意させとけ。いいな？」

何故魔法学校の近くに…？

まあ、私には分からんような深い事情があるのだろうか…

「わかった！運動してから手配する！」

後、腹筋、背筋、スクワットにマラソンをせねばいかんからな！

「頼んだぞ。じゃあな…」

そうって、フワリと呪文も唱えずに宙に浮かび上がって飛んで行かれてしまった…

この国嫌いだしゝ

ストレス解消に丁度いいからなゝ

「ルーンの力でも試しますかゝ♪

オホン、そんじゃま：

I am the bone of my sword.

―――
体は剣で出来ている。

Steel is my body, and fire is
my blood.

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life.

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create
many weapons.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never hold

d a n y t h i n g .
故に、生涯に意味はなく。

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
w o r k s .
その体は、きっと剣で出来ていた。

アンリミテッド・ブレード・ワークス
『無限の剣製』。」

瞬間、世界は変わる。空は巨大な齒車が噛み合い、地面数多の武具が乱立する荒野となる。

展開されたのは己が心象世界を現実には侵食させる奥義、魔術師の目指す到達点にして最も魔法に近い魔術。

リアリティ・マープル
名を、固有結界

アンリミテッド・ブレード・ワークス
俺の「無限の剣製」はオリジナルと違い、あらかじめ型月の世界に存在する全ての武具が内包されている邪神謹製だ。

「それじゃ、ルーンの力である」あらゆる魔法具を操る”っていう
「神の頭脳・ミョズニトニルン」の力を試すかな」

指揮者の如く腕を振り上げる。
すると辺りの武具が浮き上がり、矛先を眼下のロマリア皇国に向ける。

まるで王の号令を待つ騎士の如く、今か今かと魔力を迸らせながら空に浮かび上がっている数々の武具は正に壮観。

「何度見てもカッケーな」

自画自賛しながらも、自らの額に刻まれたルーンに魔力を注いでいく。

パアアアッ

するとルーンが光り輝いていく。

途端にこのルーンの使い方を知る。

まるでずっと前から知っていたかのように使い方を理解した。

「これなら行けるかな…？」

では…ロマリア皇国の皆さんっ！

アーンド、いけ好かない奴らっ！

俺の八つ当たりの為に消えてくれッ！！」

腕を振り下ろして武具の群れ達をロマリア皇国目掛けて射出する！

シュババババババババババババツツ！！

………

…ドガガガガガガガガガッツツ！！

射出された武具が一瞬間を空けてロマリア皇国の各地に突き刺さっていく。

それだけでも各地にかなりの被害が出ているが、ルーンの力を使ってみたいので続行する。

額のルーンが更に輝き始める…

逝くぜツ！

「遠隔操作…全宝具…真名一斉解放ッ！！」

カッッッッ！！！！

瞬間光が満ち溢れる。

それは聖剣の輝きかもしれない、あるいは炎の魔剣の炎かもしれないし、魔槍の禍々しい光りだったかもしれない。それら全てが同時に発動し、極光となって辺りを覆い尽くした…

光りが治まると…

「マジかよ…スゲーな…」

思わず呟いてしまった…

都市部は巨大なクレーターができ。辺りは更地になり、不毛の大地がどこまでも続いている。

しかも俺の魔力が地面を汚染し、当分草木一本すら生えないだろう…

これだけの惨状を作り出しておきながら、俺の魔力の消費は「無限の剣製」の展開と維持の分だけ。
アンリミテッド・ブレード・ワークス

真名一斉解放は”あらゆる魔法具を操る”という「神の頭脳・ミョズニトニルン」の能力を使って行われたので自前の魔力は一切使っ

ていない…

…これなんてチート？

つーか強力過ぎんだろ！「無限の剣製」^{アンリミテッド・ブレード・ワークス}＋「神の頭脳・ミヨズニト
ニルン」のコンボ！？

予想外だ…

でもこれ原作ブレイク完了じゃね？

だと思いが帰れない…

最早原作崩壊してしまっただが、まだ帰れない…つまり主人公達にち
よっかいかけなきやいかんのか…

「めんどくさ…」

取り敢えずストレス発散は完了したのでガリアに帰るべく空を飛ん
で行く。

どうやら嫌でもあの我が儘ピンクとは接触しなければ駄目らしい。

トリステインか…

面倒だな…

ああ癒しが欲しい…

P S .. 帰ったらジョゼフが宙に浮かびながらポージングしてました。

第二話：ストレス発散八つ当たり。（後書き）

そろそろトリステインです。ジョゼフの出番が消えてきます。

しかし、変態ジョゼフが見たいならなんとか絡ませます。

見たい…？

第三話：筋肉の栄養、未知なる食材。（前書き）

大分遅れましたね……

すみません……

対して中身が無いですが、それでもいいという猛者はどうぞ。

第三話：筋肉の栄養、未知なる食材。

side Toya

空を飛ぶジョゼフというショッキング映像を見てから約一週間経つ。
今では空を飛びながらポージングするジョゼフを見るのにも慣れてしまった。

最近「フハハハハッ！あと少し、あと少しで私は風になれる！」と叫びながら上半身裸で空を高速で飛んでいる。

筋肉も徐々についてきて、鏡の前で筋肉の仕上がりを確認しているジョゼフは常に嬉しそうな笑顔だった。

変態がパワーアップしちゃったよ……

……まあそれはともかく、ジョゼフからの情報によると。北花壇騎士7号——つまりタバサのことだ——が、後二年程で魔法学院に入学するとのこと。

つまり、原作開始まではまだ時間があるらしい。

「フハハハハッ！来たっ！来たぞおっ！限界を超えて、輝

「我が肉体っ！」

視界の隅で齒をキラリ☆と輝かせながら、大空を縦横無尽に飛び回る変態をなるべく見ないようにしながら思考にふける。

……今の内に今後の方針を決めないとなさ

とりあえず、あの高飛車ピンクとその使い魔を虐め抜くかな……

[illegible]

奇声を上げた変態を思わず”居合い拳”で撃墜する。

ベシヤツと地面に汚い染みを作るジョゼフ、もとい変態。最近はこれぐらいだと直ぐに復活するので問題ない。

「いいな？ 黙ってろっ！」

……さて、タバサの扱いをどうするかな
母親はとりあえず治して、こっちの陣営に加えようかな

タバサは好きだしね〜

てか、ルイズよりも主人公っぽくない？

品性とか性格的に……

桃色傲慢貧乳才能零娘と、蒼髪無口貧乳天才娘……　しかも、公爵と王族……

……明らかにタバサの方が優良物件だな。

しかし、タバサの悪い所は、今俺の視界の隅で言い付け通りに喋らずに鏡の前でポーズングして、自らの筋肉の成長にニヤニヤしている変態が叔父というところだな……

最近は腹筋を重点的に鍛えているらしい。お陰で鏡に写る腹筋がモ
○王みたいに割れていてる。

「美しい……美とはこのような形を言うのだろうか……次は二の腕を鍛えるか……」

自画自賛の言葉を述べてから、再び無言で筋トレに励む変態。

……せめてニヤニヤ笑いながら筋トレしないで欲しいな……

ああ、そういえば俺のガリアでの立場だが、奇遇にも俺はガリアの王族と同じ蒼髪を持っている。

なので俺は、辺境に住んでいたジョゼフの遠縁ということになったらしい。

王位継承権は無いが仮にも王族なので、それなりに良い生活を送っている。

因みに、最近ジョゼフは民から親しみのある王として人気が出てきた。

ジョゼフが変態になるのはトレーニングの時だけで、普段は気さくで親しみのある王…… となっているらしい。

……騙されてるなあ。

筋肉にいい食べ物は何か？

鍛え始めてから暫し経ち、以前より私が食事で食べる量は格段に増えた。

トーヤによると、肉体と食事は密接な関係であり、栄養価の高い食べ物を食べると、普通の食事を食べるより筋肉が強靱になるという。

無論、その後料理人に栄養価の高い食べ物を出させるように命令し、食後には生卵を飲むようにしている。

しかし、本当にこれだけでいいのか？

もっといい食べ物があるのでは？

現状に満足しているだけではないのか？

ただただ与えられる物だけで満足しているだけではないのか？

と、思い。

トーヤに聞いてみることにした。

「トーヤよ！ 栄養価の高い食べ物を何か知らないか？ 私の更なる筋肉の発達のために教えてくれ！」

トーヤは異世界人。

ならば私の知らない食べ物も知っている可能性があるだろう。

「ああ？ また唐突に……んー俺が食べた中で一番良かったのは……」
“竜”、かな？」

竜？

「竜とはあの風竜や火竜のようなものか？ ……というか食ったの

か!？ ……流石邪神様の使い……私にはその発想は無かった……」

竜か……

「美味しいのか？ どの部分が一番栄養価が高いのだ？」

一番気になる所を聞いてみる。

「ああ、旨かったぞ。特に栄養があるのは心臓じゃないか？ 魔力も身体に取り込めるしな」

竜……心臓……強く………

「？ ジョゼフ？ もういいか？ 俺は飯食いに行くからな」

トーヤが出て行ったが、最早眼中に無い。

今の私の思考は如何にして竜を食すか、ただそれだけを考えている。

自国の竜を食べるか？ ……いや家臣達が五月蠅いだろう。
ならば他国か野生の竜になるか……

他国の竜は外交問題、下手をすれば戦争になる……最も、邪神様の
使いであるトーヤがいるし、ガリア軍が負ける姿は想像出来んが…
…しかし、一定の竜を素早く確保出来るのはこの案か……保留だな。
次、野生の竜は飼い慣らされた竜よりもきっと美味くてさぞ栄養も
有るだろう……確保に手間取りそうだがな……

最高の条件は、弱い国に沢山の竜騎士が居て、かつその領土に野生
の竜も生息しているのが最善か……

……！ あそこならピッタリではないか！

「誰か！ 誰かおらんか！？」

声を聞きつけ使用人が走り寄ってくる。

「なんでしょうかジョゼフ様？」

「おお、来たか！ よいか？ 大至急家臣達を召集せよ！ 会議を始める！」

早く下ごしらえをせねばいかんからな！

「なんの会議でございますか？」

「うむ。我等はガリアは……………」

…………アルビヨンに謀略を仕掛ける！！」

待っておれ、我が筋肉の糧よ！

第三話：筋肉の栄養、未知なる食材。（後書き）

私は断固タバサ派です。

次点で、フーケも好き。

女王様はそんなに好きじゃ無い。

文句は受け付ける。

自分の主張を出してこいッ！

第四話、きんにくばんづけ（前書き）

生存報告のために投稿。

中身のない駄文ですので期待しないで（泣）

第四話、きんにくばんづけ

side 十夜

ガリアはアルビオンに謀略を仕掛けました。

……バカだ。

変態だと思っていたんだが、まさかバカでもあったのか……

ジョゼフが自らの筋肉の栄養のためだけに原作道理になるとは予想外だ……

ちなみに、アルビオンを選んだ理由が

竜肉は栄養満点らしいよ！

← なに！？ 急いで食べなくちゃ！

← 自国のは駄目だよ！

← なっなんだってー！

← 自国が駄目なら他国のを食べればいいじゃない。

← えーと、カモは

弱くて他国に感知されにくくて、竜騎士や野良の竜がいそうなところ

……

←

……アルビオンじゃん！

ってことらしい。

ちなみに戦争じゃなくて謀略なのは、管理がめんどくさいから他国に管理さして竜だけ貰おうって魂胆らしい。

さすが狂王！　そこに痺れも憧れもしないぜっ！

そして今現在ロマリアが大混乱に陥っている今こそ領土を増やすべし、って感じで賄賂に煽動、脅しに人質……まさしく鬼畜の所業。まあそんなこんなでガリアはてんでこ舞いです。

さて、そんな忙しい中私が何をしているかという……

いつもならば賑やかな町の酒場が静まり返っている。
人はいる。

だが全員息を殺して静かに”その時”を待つ。

コツツコツツと足音を響かせながら俺は酒場添え付けの舞台に上がる。

舞台中央で立ち止まり、一度ぐるりと辺りを見回す。

ピンツと張り詰められた空気が漂い、誰かがゴクリと唾を飲む音が聞こえる。

俺は一度頷くと服をたくし上げ、二の腕に力強くコブを作ると一言。

「きんにくをあがめよ」

ツわああああああああああああああああああああッッッ！！

その瞬間、ブワッと弾ける汗と臭い。

比較的筋肉質な人から、ガチムチやガリガリ。

老若男女様々な人種が一同に集まり歓喜の雄叫びを上げる。

「負けた……っ！」 「なんて筋肉だ！」 「正に芸術っ」 「あれが黄金比！」 「俺もっ！ 俺も何時かあの黄金比を体現してみせる！」
「筋肉ハアハア」 「ふつくしい……」

様々な言葉を喋りつつも、一瞬たりとも二の腕から目を離さない。
まるで目に焼き付けるかのようにじっと観察しつづける。

……変態の巣窟だ。

そう、今回はガリア国ジョゼフ発「筋肉同好会」という巫山戯た会の会合で、アルビオンのとある酒場に来ています。
会長はもちろんジョゼフ。そして俺は”会内筋肉番付筆頭”といういわばNo. 2の座に何時の間にか就いていた。

……勘違いするなよ？ 好きで就いてるんじゃないからな？
今回俺が会合に来た理由は、会合が開かれるのがアルビオンである

からだ。

その内偵調査やクーデターを起こす実行犯に会いに来たのだ。

ジョゼフからの指示……というかお願いを受け、オリヴァー・クロムウェルに会いに来たわけだ。

しかし、何故俺が……他にも人はいるだろうに？

ジョゼフは「会ってやってくれないか?」と、上半身裸でブリッジを決めながらお願いして来たから思わず頷いてしまったんだが……

……思い出したらブルりと来たぜえ。

みんなも想像して欲しい。

妙にテカッてる上半身裸のムキムキのオッサンが、満面の笑顔を浮かべながら尋常じゃないスピードでブリッジの状態で近づいて来たから……

仕方ないよな？

まあそんなこんなでオリヴァー・クロムウェルを探してるんだが

•
•
•
•
•
•

の前に。

[illegible]

さつきから鬱陶しい変態どもを黙らすとするかね。

第四話、きんにくばんづけ（後書き）

駄文でスマソ。

久しぶりだとジョゼフのテンションを書ききれない……

番外編はサラツと流すつもりです。じゃないとキリがないので……

いちよう生きてるからね！

それではまた（；|；）／~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2238j/>

～とことん引っ掻き回しに来た～異世界訪問録

2010年10月8日12時59分発行